



徳川時代の日本大改造(一)

治水と農業生産力の向上

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねたか



戦国時代末期の日本の人口は約千二百万人でしたが、百年後の元禄時代には約三千万人と二・五倍に急増しています。平和の到来とともに河川の治水が進んで、大量の新田開発が行われたことも、この人口爆発の主因の一つでした。

日本の河川は、大陸を流れる大河に比べて、距離は短く傾斜度が強く急流で、いったん大雨が降れば短時間で猛烈な洪水を引き起こします。ですから平和になって各大名の領国に跨る総合的な治水工事が行われるまでは、河口に近い広大な沖積地の利用は困難でした。河口は葦の茂った湿地帯で、田は棚田のような形で少し高いところに作られていました。

徳川幕府が始めた全国的な治水工事は、幕府直轄のもの、大名に命じて行われたもの、天下普請として各大名総出で行ったもの、と

色々ありましたが、いずれにしても河川の役割は領地の防衛線であることから解放されて、農地の飛躍的な増大に繋がりました。

莫大な費用を要する工事を命じられた大名達は、これは幕府の強権政治そのものであると嘆きました。確かに多くの大名が次の戦のために大事に守ってきた軍事予備費を、民政のために転用・活用して放出させる結果となったのですが、いずれにせよ、この日本列島大改造は日本を一転させました。

中世から戦国時代までの村は、常に戦火に侵される危険があり、一カ所に集団で暮らし、堀を巡らせたり、いざという時のために逃げ込む隠れ地を持つたりしていました。農家には多くの名子・下人が住み、彼らは厳しい農作業に加え、一旦ことあれば何

時でも武士に変わりうる存在でした。

それが平和の到来によって、農を選んだものは専業の農家になりました。そして平和が続くにつれて、村は強い自治性は維持しましたが、農家は家族単位で農地に近いく所、農家は家族単位で農地に近いく所、農家は家族単位で農地に近いく所に家を持ち、生活の向上と子々孫々のために田畑を広げていきます。こうなると農業の生産性は飛躍的に向上します。

一方、武士社会では一国一城が原則となり、領国の中心となる城下町は最大の消費者である武士が住む都市となります。都市は市場経済を発達させ、文化を育てる場です。十七・八世紀の日本は世界で最も充実した都市文明を持っていました。ただ、それだけの都市人口を養えるだけの豊かな社会システムが育つてきたことになりました。



薩摩土手(静岡市葵区井宮町)。賤機山西麓の妙見下から弥勒・中野新田に至る長さ4.3km、高さ5.5mの土手の築造で、駿府城下町は安倍川の洪水から守られた。